「山中一揆入門」

1 過去の研究は山中一揆をどう評価していたか

【戦前】

○黒正巖「作州山中百姓大一揆」『封建社会の統制と闘争』、改造社、1928年

山中地方は作州の内でも西部山間に位し経済的には最もみぢめな所であつて、平年でも窮迫の下に百姓共は生活してみたのである。

ありふれたる百姓一揆と同じやうに、平素の苦痛と鬱憤とを只の一時でもよいから癒やし度いといふ気分、政府の混乱に乗じての反抗といった様な気配が、この一揆に現はれてゐる。

(略)

結局農民は徒に多くの生命を失ひ、又長時日の騒動に業を^ほくして大なる物質的損失を蒙つた以外に殆ど何物をも得なかつた。

【人民闘争史の時代】

○林基

▲「百姓一揆概観」『百姓一揆の伝統』新評論、1955年

一七二六（享保十一）年には、美作津山藩の農民は、藩主が早死して幕領に編入されると知るや、幕領の租率との間の超過分の返還を要求して蜂起し、八千人の農民が五百人の藩兵と衝突しながら、千八百俵の米券を獲得し、さらにただちに豪農層に迫ってこの米券を現物と交換させてしまうという政治的機敏さを発揮している。

これらは、一揆がその指導者に人を得て、社会の政治的経済的变化に敏感に反応する感覚と広い視野が農民の間に広く浸も通り、それによって農民の間に行きわたるところあらゆる形の闘争組織が作り出されつつあったことを示している。

▲「百姓一揆」『続百姓一揆の伝統』新評論、1971年

こうしてこの大闘争も多数の犠牲をだしてついででしたが、それは歴史上のすべての農民蜂起のさけられぬ運命でした。

◆亀井政男「美作国山中一揆の歴史的背景 上・下」

『岡山史学』3・4号、1957年

○佐々木潤之介編『日本民衆の歴史 4 百姓一揆と打ちこわし』三省堂、1974年

津山藩の一揆は、年貢減免を主要なスローガンとした要求項目、全藩の農民が蜂起に参加したという行動形態、農民を苦しめているのは公儀である藩主ではなく、家臣・代官・大庄屋などであれうと考え、かれらを批判し・追求の対象とした農民の意識、蜂起そのものが藩権力に対して重大な脅威をあたえたという現実的効果、などの諸点において、同じ時期に諸藩でおこった一揆と共通するものがあり、享保期の全藩一揆の代表的なものであるといえよう。

【民衆運動史の時代】

◆横山定「美作国津山藩 1726(享保 11)年百姓一揆の運動構造」

『歴史評論』583号、1998年

※以後は、山中一揆に関するまとまった記述はなくなる。

→作法等に関する研究の中で部分的に触れられる。

○保坂智『百姓一揆とその作法』吉川弘文館、2002年

享保期中国地方の、否、享保期の全国の一揆を代表するのが、一七二六年（享保一一）美作国津山藩山中一揆である。この一揆には二つの要因がある。その一は、年貢率に四％を加える「四歩加免」と納期短縮による年貢増徴策であり、二は、藩主が死去して知行高が半分になることである。収公される土地は山中地方を含む西六触（触とは大庄屋の支配単位）であろうと想定された。…ここまでは、各地で発生する全藩一揆とかわりはない。しかし一揆はさらにつづいた。津山藩から分離されることを確信している西触の百姓らは、新領主が赴任するまでに村々を管理しようとした。罷免された大庄屋にかわり、各触二名の惣代と各村一名の「状着」により地域が管理された。そして納め過ぎた米と算用帳の請取を求め、庄屋等のもとに押しかけ、実力で奪い取ったのである。西六触は津山藩から分離された地域になりつつあった。ここにいたって藩は弾圧を決意する。鉄砲を含めた鎮圧部隊が山中へ派遣された。百姓側も一時これを阻止しようとし、鉄砲等を持ち出し準備したが、藩の申渡に依ってそれらを放棄し使用することはなかった。鎮圧部隊は一揆を制圧し、頭取らを逮捕したが、そのうち三〇名はその場で斬首され、さしもの大一揆も壊滅したのである。

○近年の研究

国立情報学研究所 CiNii Research

▲「百姓一揆」で検索した結果のうち、研究論文

2024年0件 2023年4件 2022年0件 2021年2件 2020年3件

▲書籍 2018年 若尾政希『百姓一揆』（岩波新書）が最後

※「一揆」で検索

→ 2024年 ウィリアム・W. ケリー『19世紀日本における服従と反抗：
山形県庄内地方の四つの集団抗議』（文学通信）

2 「百姓一揆」とは - 現在の研究成果から -

◎江戸時代には「一揆」と呼んでなかった。

- ・「一揆」=百姓らが武器を持ち権力と戦闘を展開するのが一揆という認識があった。
- ・寛永14~15（1637~1638）年の島原・天草一揆を最後に「一揆」という文言は使われなくなる。

▼江戸時代、幕府・藩は「徒党」「強訴」「逃散」という文言を使用する。

「徒党」=よくないことを百姓が大勢申し合わせる行為。

「強訴」=徒党の上で強いて願いを行うこと。

「逃散」=申し合わせを行った上で村を立ち退く行為。

←明和7年の禁止令における規定

享保9年（1724）「享保度法律寄」

「徒党の強訴を企て候頭取、此類都て磔又は獄門」

寛保2（1742）年「公事方御定書」→「逃散」も含む

寛延3（1750）年令→百姓一揆禁止を五人組帳前書に記載義務づけ

明和7（1770）年令→高札として掲示=明治維新まで引き継がれる。

※一揆史料では全体を「百姓騒動」と表現することが多い。

学校では

「17世紀後半からは、村々の代表者が百姓全体の要求をまとめて領主に直訴する一揆（代表越訴型一揆）が増え、17世紀末になると、広い地域にわたる大規模な惣百姓一揆も各地でみられるようになった。」（『詳説日本史 改訂版』山川出版社、2017年3月発行）←「直訴」は基本的に認められる。

◎百姓一揆の「作法」が18世紀後半以降定式化する。

=地域性や時代を超えた共通の行動様式

百姓たちのやむを得ない行為であると人々を納得させるだけの訴えの内容と、それにふさわしい組織・行動様式が求められ、それが社会的に蓄積され共通認識が

形成される。

例：結集＝火と音

出立＝簞笠

得物＝農具、大工道具類←殺傷能力のある武具はほとんど登場しない。

訴え＝「百姓成立」を求める

◎18世紀後半以降百姓一揆の作法は変質しはじめ、天保期にそれが決定的になる。

→「世直し一揆（騒動）」の登場。

- ・18世紀後半以降＝打ちこわしや焼き討ちなど脅迫文言による動員の出現
竹槍が持ち出され始める。
- ・天保期：再暴力化＝無宿者等の参加→盗みや放火などの行為、帯刀などの逸脱行為。

3 今後の山中一揆研究は（私見）

◎現在の研究において、山中一揆はどのように位置づけられるか。

＝百姓一揆の成立期における重要な「一揆」。

百姓一揆成立を考える上で鍵となる「一揆」の一つ。

←百姓一揆の「完成」は、18世紀中期と考える

〈根拠の例その1〉

・『月堂見聞集』

享保十二年

○正月十五日出に申参候写。

美作国津山城下百姓八千人一党仕候て、山中へ取こもり申候。其趣意は、殿様へ御恨在之由也。依之、正月四日御城内より御家中十二頭、惣人数五百人余陣立にて、鉄砲・石火矢筒・具足・鎧・長刀・陣幕等持参にて、山中百姓一揆の方へ向ふ。同十三日、両方相戦ふ。百姓の方敗走す。獄門百三十人計、磔五十人計、牢舎二百人余也。然れども、余党あまた許多も行衛不知、城内武家等生死不知。

・『作州古談』

一享保十一丙午年十一月、西山中百姓騒動して未ノ春二到し由、三木正爰先生の話二其時銃を不用八訳有之、銃を用ゆれ八百姓一揆と云に成るよし云り

※「一揆」となる可能性をはらんでいた。

〈根拠の例その2〉 刑死者の問題

○保坂智『百姓一揆とその作法』吉川弘文館、2002年

私は強訴型の全藩一揆の登場をもって、近世民衆の集団的で非合法的な闘争、すなわち百姓一揆が成立したと考える。しかし、強訴という用語が享保期の末になってやっと定着してくるようになり、強訴行為に対する法規制は遅れていた。幕府・諸藩にとって、この強訴を規制する法は、本来は一カ村あるいは数カ村の百姓結合を規制するものである徒党しか存在しなかったのである。

この法規制の遅れが、幕府・諸藩の一揆処罰に、大きな混乱を生んだと考える。百姓一揆に対する処罰は、領主と百姓の間の力関係により、法規定のいかんにかかわらず、変化する。大規模で、藩政の基盤をゆるがしかねない一揆でも、百姓に対する処罰が軽微であったり、なかったりする。逆に小規模な一揆でも、あるいは小規模な一揆だからと言い直す必要があるかもしれないが、多数が重罪に処せられる例もある。しかし、それを考慮したうえでも、享保期の、特に中国地方で連続的に発生した一揆に対する処罰は異常と言えるものであった。

多くの藩は一揆に対して処罰をしえていない。ところが、三次・広島・津山藩山中一揆の場合は、多数の人を、ほとんど吟味せずにその場で、あるいは翌日ないし数日たって処刑している。この処刑を、盗賊として扱ったからと理解する考え方もある。しかし、盗賊であっても、抵抗したり、反撃してくる場合以外は、吟味もせず処刑することは国家公権を分掌する藩としては許されない行為である。三つの一揆で処刑された人々は、そのすべてがすでに逮捕され、抵抗も反撃もできない状態にあった。

また、対象となる百姓一揆が、百姓一揆としてのあるべき様子を逸脱したからであると考えられる人もいる。具体的には武装蜂起へ転化する芽をもっていた、あるいは藩にそう見なされたとする考えである。中世後期から近世初頭の武装蜂起型一揆に対しては、領主軍はなで切りを原則としていた。それに類似するとの考えである。たしかに、山中一揆の場合、百姓一揆側が鉄砲などを準備する局面があるから、この考えを完全には否定できない。しかし、三次・広島両藩の一揆の処断を説明しえないのである。

〈参考1〉 難波信雄「百姓一揆の法意識」『一揆 4』東京大学出版会、1981年

たとえば一六九六年(元禄九)津山藩領一揆は、森家の改易によっていったん幕領となったのち、松平長矩の所領となって、五公五民の「御公儀御法」を願う農民と、六公四民を定免とし、小物成増徴・正大豆納を命じた松平氏との間に生じた。藩側は、はじめ自らの方針を「天下の法」と主張したが、大庄屋の反論にあ

って「御領法」といいかえざるをえなかった。しかしその結果は「非義なる願」とされ、一方的な農民に対する弾圧で幕を閉じる。この松平氏による享保改革に端を発した一七二六年(享保十一)山中一揆は、さきの一揆が大庄屋を中心としたのに対し、農民の大庄屋廃止要求や打ちこわしを伴った点でも大きな変化がみられるが、年貢・諸役・諸運上の増加反対という実際上の主要求を、「御上をかすめ、下をなやまし、仏事神事を軽じめ、仁義五常の祭事をいましめ」る等の「前代未聞の荒所務」を行った改革責任者を追及するという、「無情御仕方」の一環として位置づける闘争方法をとるのである。

「一旦の道理を尋ね、一戦に及」ぶという態度をとった藩は、「百姓非道」「法外無法」ときめつけ、鉄砲を備え、明石藩をも動員する武力弾圧のもとに、数十人ともいう農民を切り捨てた。代官の記録によれば頭取人の居家を人足をもって潰し、人質をとって妻子までも召捕りに及んだが、この「勸善懲悪」のみせしめは、藩の論理によれば「常躰の咎人」としての農民に対するものではなく、打ちこわしを行った「盗賊」の所業に対するものであった『備前備中美作百姓一揆史料』一、一九〇一二頁)。盗賊と規定することによって、一切の法的保障をとりはらっている点に注意したい。このように改革政治による収奪強化を新法ととらえ、その立案施行者を「悪」の象徴として非難する例は少なくないが、それは新法に対する右のような観念や非法の観念と関連しているといえるであろう。非法・新法を攻撃目標とする農民を強引に盗賊と規定していることに領主側のこだわりが感じとられる。

〈参考 2〉 横山定「美作国津山藩 1726(享保 11)年百姓一揆の運動構造」

しかし、最終的に、西触に対する藩側の処分は苛烈をきわめたものになった。この処分は、難波信雄氏が指摘するような、「非法・新法を攻撃目標とする農民を強引に盗賊と規定し」、「打ちこわしを行った『盗賊』の所業」に対する処分としておこなわれたものではない。これは、これまで述べてきた、特に第三段階における一揆の行動・目的が「対役人手向」行為として、「討捨」てられたのである。この処分の苛烈さこそこの一揆が「百姓一揆」段階を越えた闘争であったことを示しているのである。

◎美作と安芸、備後、伯耆、因幡、播磨の百姓一揆等の刑死者数（別表）

		国	郡	藩	形態	推定参加者	死罪
元禄11	1698	美作	東北条郡ほか	津山藩	強訴※	500人	8人
享保2	1717	因幡・伯耆	(8郡)	鳥取藩	強訴	4000人以上	0人
享保2	1717	備後	沼隈郡ほか	福山藩	強訴	6000人以上	0人
享保3	1718	備後	恵蘇郡ほか	三次藩	強訴・打ちこわし	5000人以上	7人?
享保3	1718	備中	下道郡	岡田藩	(越訴)		4人
享保3	1718	安芸・備後	(14郡)	広島藩	強訴・打ちこわし		65人(注1)
享保11	1725	美作	真島郡ほか	津山藩	強訴・打ちこわし	3000人以上	51人
元文元	1736	備後	甲奴・神石郡	幕府領	強訴	6000人以上	4人以上
元文4	1739	美作	勝北郡	幕府領	徒党(押乞)	2000人	2人
元文4	1739	播磨	佐用郡	旗本松井氏	強訴		1人
寛延元	1748	播磨	印南郡ほか	姫路藩	強訴・打ちこわし	1000人以上	7人
天明6	1786	備後	恵蘇郡ほか	広島藩	強訴	5000人以上	2人
天明6	1786	伯耆	汗入郡ほか	大山寺領	強訴		?
天明6	1786	備後	品治郡ほか	福山藩	強訴		0人
文政8	1825	美作	吉野郡ほか	津山藩・幕府領	強訴・打ちこわし		0人
天保4	1833	播磨・丹波	(6郡)	幕府領ほか	打ちこわし	3116人	2人
嘉永元	1848	播磨	揖東郡ほか	龍野藩	強訴・打ちこわし	3000人以上	0人
慶応2	1866	美作	東北条郡ほか	津山藩	強訴・打ちこわし		0人
慶応3	1867	備後	恵蘇郡	広島藩	強訴・打ちこわし	5000人	0人

※『百姓一揆事典』（深谷克己監修、民衆社、2004年）より作成。

(注1)『広島県史』などでは、49人となっている。

→享保3年の広島藩と山中一揆が突出している。

○広島藩の場合

- ・郡単位「百姓壹郡宛徒党して」（参加郡数 14 郡）
- ・処罰は一揆終結後約 40 日経過したのち。

○山中一揆の場合

- ・真島郡・大庭郡が主（なかでもその北部）＝限定的
- ・処罰：1月13日3時ごろ土居河原で52人捕縛
→15時～17時の間に25人「打捨」
理由＝「賊党共義、役人手向候に付」

4 第三回・第四回・第六回へ

第三回＝山中一揆の経過（1）～一揆前夜から強訴まで～ 令和7年7月6日（日）

第四回＝山中一揆の経過（2）～強訴後の様相と終焉～ 令和7年9月28日（日）

第六回＝山中一揆を伝えたもの～記録と顕彰～ 令和8年3月8日（日）

（ 会場：湯原ふれあいセンター
時間：午後1時30分～午後3時 ）